石碑は語る 109

―震災特集特別編

千年の丘（宮城県岩沼市）

ＪＲ仙台駅から空港アクセス線に乗って約30分。仙台国際空港に着く。こじんまりとした印象だが、現代風の建築美を感じさせてくれるきれいな空港だ。「国際」という名が付くだけあって、ここからは国内各地だけでなく、ソウル、グアム、北京、上海、台北の各都市との間で航空機が乗り入れている。

仙台空港は仙台の南、岩沼市と名取市にまたがり、東北の玄関口となってきた。太平洋から1キロほどしか離れていないという立地条件が、東日本大震災では災いした。

２０１１年３月11日、午後2時46分。仙台空港のある岩沼市は震度6弱の強い揺れに襲われ、空港は津波で水没し、駐車してあった多くの車やがれきで埋め尽くされた。外からのアクセスも途絶え、空港は陸の孤島と化した。

仙台空港の程近く、太平洋沿岸に「千年希望の丘」が広がる。標高は10メートルほどある。この丘、もともと存在したものではなく、震災で発生したがれきなどを集めて埋められた人工の丘だ。大津波の痕跡や記憶を千年先の後世に伝え、将来、再び襲い掛かるであろう津波の力を減衰させ、避難場所としても活用する目的がある。

空港横の相野釜エリアの一角に東日本大震災慰霊碑とモニュメントが立つ。天を指すように伸びる2本の塔は津波の遡上（そじょう）高と人と人が支え合う形をイメージし、中心の鐘（かね）は鎮魂と記憶、希望の意味が込められているという。

碑文は「この災害により壊滅的な被害を被ったが、その住民は、玉浦の再生を目指し、生活再建の一歩を踏み出すため、旧集落のつながりを維持しながら、新たなまち『玉浦西』への集団移転を行うこととした」と、震災によって居を移さざるを得なかった事実を記す。さらに、「かけがえのない命を失われた多くの住民並びに、住民の生命を守るため自らの危険を顧みることなく避難誘導にあたり、心ならずも殉職された警察署員、消防団員、区長、市役所職員の御霊に哀悼の誠を捧げるとともに、先祖から受け継いできた愛するふるさと岩沼を、更に誇れるまちとして子々孫々継承するため、力強く復興を成し遂げることを誓い、この千年希望の丘の地に慰霊碑を建立する」と、犠牲となった人々への哀悼と未来への思いを刻んでいる。

相野釜からさらに南、3キロほど行った二野倉・長谷釜エリアには5メートルを超える大津波に1棟だけ耐えたという石蔵が残っている。2階の窓の横には津波の遡上高を示す標識もある。この石蔵、宮城県代協会長で、エス・ハートを経営する小林良昭氏の実家の蔵だった。家屋が盾となって津波の威力をそぎ、ほとんど被害のない状態で残ったのだという。今では震災遺構として、東日本大震災を後世に伝える貴重な証言者となっている。

千年希望の丘は地域の住民の植樹により、緑の堤防へと育まれていく。木々はやがて大きく成長し、次の代、さらに次の代へと緑を受け継いでいく。

木の1本1本に込めた思い。そこには千年の歳月を経るとも、人々の命を守り続けてほしいとの願いが込められている。（次回は「決壊」郡山市・須賀川市を予定）

◇

【地震メモ】岩沼市では沿岸で29平方キロメートル、市域の約48％が浸水。間接死を含めた人的被害は死者１８６人、家屋の被害は全壊７３６棟、大規模半壊５０９棟、半壊１０９７棟に及ぶ。大きな余震も続き、11年4月7日には再び震度6弱（M7・2）、同11日には震度5弱（M7・0）の揺れを観測している。巨大地震の後には大きな余震が来ることを心に刻まなければならない。

【参考】東日本大震災岩沼市の記録（宮城県岩沼市）、千年希望の丘（岩沼市HP）

【アクセス】慰霊碑：空港アクセス線「仙台空港駅」から約1キロ

慰霊碑

大津波に耐えた石蔵。津波高も表示されている